

76. 北里大学における腎移植の現況 (XV)

渡部浩二, 柏木 登
(北里大移植免疫)

1989年12月までの死体腎移植65例について2年間の成績をみると最近の CyA (6mg), Misoribine, Prednisolone, ALG の4剤併用例が副作用も最も少なく, 腎機能良好。他の臓器移植の推進には脳死体からの移植が条件だが, 本学教職員, 学生の意識調査では死は脳死で考える(約50%), 心臓死(約23%), であったが, 死後腎提供容認は, 不明(17.1%)を含めると84%を占めた。本学 Social Worker の調査でとくに患者側の情報を的確に受けとめる姿勢が肝要と指摘, などを報告。

77. 大腸癌再発例の検討

渡辺義二, 入江氏康, 丸山尚嗣
原田 昇, 佐藤裕俊
(船橋市立医療センター)

大腸癌再発42例について臨床病理学的特徴および治療成績について検討した。治癒切除181例中42例(23.2%)に局所, 肝, 肺, 脳等に重複して再発を認めた。占居部位では直腸25例, S状結腸8例, 上行結腸4例, 盲腸3例, 下行結腸2例であった。再発例の組織学的進行度はstage III 17例, IV 16例, II 6例, V 3例であった。再発例の組織型をみると分化度が低い程再発傾向が強かった。再発例10例に対して13回の切除術を施行した。局所再切除, 肝切除例に予後良好例を認めたが肺および脳転移切除例は1年以内に死亡した。

78. 胆道癌の治療方針—stage IV 胆嚢癌の術中照射療法の術式と成績について—

轟 健, 折居和雄, 石川詔雄
深尾 立, 岩崎洋治 (筑大)

筑大開設以来14年間に経験した胆道癌206例中98例が胆嚢癌であった。85例はstage IV(AJCC分類)で, 手術時遠隔転移のなかったstage IV36例中, 切除単独の8例と術中照射併用の14例について術式と遠隔成績を報告した。切除単独では2例に肝切除, 1例に膵頭十二指腸切除を行ったが, 最長生存期間は8.1カ月であった。最近の術中照射例では肝区域切除(S4, 5)に胆管または膵頭十二指腸の合併切除を行ない1生率48.6%, 2生率25.2%となった。

79. 肝細胞癌に対する免疫合併療法—N-cwv 動注の再発抑制効果—

渡辺一男, 竜 崇正, 坂本 薫
飯塚 浩(千葉県がんセンター)
浅野武秀 (千大)

肝細胞癌の28治癒切除例において, 術前 N-cwv/Lip. 動注群11例の遠隔成績を非動注17例と比較検討。①動注群は局所の著明な T-Cell 浸潤, 末梢 Ts 分画の低下と Th/Ts 比の上昇。②全再発15例の内, 12例が1年以内に再発。動注群再発4例は全て1年以内に再発で, 以後の再発はない。以上より本動注療法は免疫賦活に作用し, 術後2年以後の2次発癌による再発の抑制が示唆された。

80. 多臓器不全(MOF)と Humoral Mediator

平澤博之, 菅井桂雄, 大竹喜雄
織田成人, 志賀英敏, 北村伸哉
松田兼一
(千大救急部・集中治療部)

MOFの病態の根底にある細胞機能不全の発生機序のひとつとしての各種 humoral mediator につき検討した。 β -glucuronidase, granulocyte elastase, lipid peroxide, TNF等の血中濃度はMOF群で対照群より有意に高く, これら mediator の MOF 発症における関与が示唆された。Humoral mediator に対する対策として inhibitor や antagonist 等の薬物療法や持続的血液濾過(CHF)による体内からの除去等が有効であることが示唆された。

81. 直腸癌の治療

木村幸三郎(東京医科大・外科)

本教室では, 進行直腸癌に対し, 根治性の向上, 局所再発の低下, 機能温存を目的とし, 術前照射療法を施行している。現在, 直腸癌手術において, 術後の排尿・性功能障害の発生が問題であり, 患者の quality of life をふまえ, 癌の進行度に応じた治療法が選択されている。今回, 術前照射療法, 術前照射+免疫化学療法, 自律神経温存術等について講演する。

82-1. 膵腎同時移植のための基礎的研究—温阻血腫の移植—

榎本和夫 (千大)

本邦の特殊性を考え, 温阻血腫の移植について検討し